

平成三年度

国 語

(第一回入試)

注意

- 一、 問題用紙と解答用紙が配られたら、まず解答用紙の決められたところに受験番号と氏名を書いてください。
- 二、 試験開始の合図があるまで、表紙を開けないでください。
- 三、 試験開始の合図があったら、問題のページ数を確かめてから始めてください。
- 四、 この試験は、十二ページあります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげてください。
- 五、 印刷のはっきりしていないところがあったら、だまって手をあげてください。
- 六、 試験終了の合図があったら、すぐに鉛筆を置いてください。
- 七、 その後、解答用紙を集めますので、解答用紙を机の上に、表を上にして置いてください。

(問題用紙は持ち帰ってかまいません。)

- 八、 国語の試験時間は五〇分です。(九時四〇分に終了予定です。)

- 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。)

絶対に不可能と言われるリンゴの無農薬・無肥料栽培に挑戦してきたが、一向に改善されず、絶望のあまりロープを持って山に登ってきた筆者が目にしたものは……

「えっ、こんなところにまだリンゴの畑があったのか」

人の手が入らなくなって久しい見捨てられたリンゴ畑だと思ったのです。夢か幻か。もう①自分が何のために山に登ってきたのかも忘れてしまいました。実はこの辺はドングリが生える高さの限界でした。毎日、リンゴのことばかり考えていたから、ドングリの木がリンゴの木に見えたのです。

とにかくその木は自分のリンゴの木とは全く違い、虫の被害もなく、見事な枝を張り、葉を茂らせていました。私はその②魔法の木に一瞬にして目も心も奪われました。

こんな山の中でなぜ、農薬を使っていないのにこれほど葉をつけるのか。なぜ虫や病気がこの葉を食いつくさないのか。その木の前に杲然と立ちすくんでいました。あたりはなんとかがわしい土の匂いに満ち溢れ、肩まである草をかき分けると、足元はふかふかで柔らかく(ア)シッケがあります。雨のせいではありません。クッションを敷きつめたような(イ)カンシヨクです。そして突然稲妻に打たれたかのように、③「これが答えだ」と直感しました。

夜中近くなっていました。食べ物を口に入れなくなってからだいぶたっています。

女房は心配して畑まで来て待っていました。山から私は息せき切って駆け足で下りてきました。そこで女房に「お前、なんで来てるの」と言ったそうです。よからぬ予感を胸中に感じつつ、もしやと心配して来ているのに私にそう言われたそうです。

ところが、私は「答えがわかった」という喜びで踊り出した気持ちです。「明日、明るくなったらまた行く」。女房にはなんのことかわからなかったと思います。

翌日、日が昇ってからまた同じ場所に行ってみました。このあたりだと(ウ)ケントウをつけて行ってみると、前日のロープが落ちていました。リンゴの木と勘違いした自然のドングリの木は、私の無残なリンゴとはまるで違う元気いっぱいの野性児の顔でした。自分の畑との決定的な違いを再確認しました。なんとも言えない土の匂いです。バクテリアや菌がしっかり生きています。これが答えでした。

雑草が文字通り草ぼうぼうの生え放題、伸び放題で、地面は足が沈むほどふかふかしている。「やっぱり土が違うんだ。そうだ、この土をつくればいい」。ほんわかと柔らかく温かい土を手で掘って袋に入れ、匂いが飛ばないようにきっちり口を閉めて持ち帰りました。その土の匂いと自分の畑の匂いを比較して、山の土に近づけるにはどうしたらいいか、④万策尽きたはずなのに、もうやることにそれこそ山ほど出てきました。

それまで木の上のことしか見ていませんでした。雑草を刈り、葉の状態ばかりが気になって、根っこの部分は全くおろそかにしていました。雑草は敵だとずっと思いいましました。それがとんでもないことだったと気づき始めました。まさに⑤コペルニクスの転回と言っているかもしれません。

一般参考書に書いてあることで頭がいっぱいで、他を見ることができないほど視野が狭

くなっていたようです。ここには浅はかな人間の知恵が入る余地はありませんでした。頭を空にして初めて、自然の生態を見ることができました。

ドングリの木の周辺に目をやると、そこは生命があふれ、すべてが循環しているのだと気づきました。ハマキムシのような害虫は見当たらないが、バッタやアリやチョウなど無数の生物それぞれが命をつなぐために互いに密に活動している。何一つ無意味なもの、邪魔なものなどない。ドングリの木もそれだけで生きているのではない。周りの自然の中で生かされている生き物だと気づきました。

そう思ったとき、ああ、人間も本来そうじゃないのかと感じました。人間は⑥そんなことをとつくと忘れてしまっている。自分一人で生きていると勘違いしている。だから⑦自分が栽培している作物も、農薬を撒くとどんなに自然の調和環境から逸脱して本来の姿から変質していくのか、少しも理解しないで突き進んできたのではないかと思いました。自分は今これまで何を勉強してきたのかと、この数年間のことを思わずにはいられませんでした。

去年の秋、またあの山に登ってみました。だれもが急な沢の登りに音をあげてたどりつけないところです。ロープをかけて落としたドングリの木は大きく成長し、もうその横枝には手が届きません。二十余年の歳月を感じました。その木のわきに山桜があつたのが忘れられません。

すぐそばにクマの新しいフンを見つけました。ハエが真っ黒にたかっています。あの時もしつと、クマが(エ)ヒソんで私のことを見ていたのではないのでしょうか。帰りにはカモシカに出会い、お互いびっくりしました。

私は死に損ねたわけですが、死ぬ気持ちでいかなないと自然は答えを教えてくださいませんでした。自然は(オ)ザンコクだと思いましたが、こうして生きて自然栽培のリングにたどりつくことができました。

私は何度も失敗して答えを得ました。失敗がなければ答えがないわけです。人よりも多く失敗したから答えを多く得た、ただそれだけじゃないか。私はバカだからそれを超えた。リングも仕方ないと思ってくれたのでしょう。山の自然からのご褒美^{ほうび}だったかもしれません。

(問題用の一部省略したところがあります。)

木村秋則 「リングが教えてくれたこと」

問一 二重傍線部(ア) (オ) のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「自分が何のために山に登ってきたのか」とありますが、「何のため」と思われますか。その根拠となる五文字を本文から抜き出して答えなさい。

問三 傍線部②「魔法の木」というのはどうしてですか。四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部③「『これが答えだ』と直感しました」とありますが、その答えを二十字以内で答えなさい。

問五 傍線部④「万策」と同じづくりの熟語を次の中から選び記号で答えなさい。

ア 有無 イ 創造 ウ 必要 エ 日没 オ 着陸

問六 傍線部⑤「コペルニクスの転回」について次の問いに答えなさい。

(1)「コペルニクスの転回」の意味として最も適切なものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 科学の力によって解決しようとする事
イ 伝統的なものの見方や考え方を直す事
ウ 新しい観測結果が第一であると重視すること
エ 従来のものの見方や考え方を引き継ぐこと
オ ものの見方や考え方が正反対に変わる事

(2) ここでは具体的にどういうことを指していますか。簡潔に説明しなさい。

問七 傍線部⑥「そんな」の指す内容を答えなさい。

問八 傍線部⑦「自分が栽培している作物も、農業を撒くとどんなに自然の調和環境から逸脱して本来の姿から変質していくのか、少しも理解しないで突き進んできた」とありますが、同じ意味の表現を文章中から九字で抜き出ささい。

問九 この文章の特徴として最も適切なものを選び記号で答えなさい。

ア 筆者は現実の農業の厳しさを読者に伝えるために、あえて大げさな表現を用い印象付けることをねらっている。
イ 筆者は自分の経験からわかったことを平易な文章で書くことで、その時の感情や感動を淡々と述べている
ウ 筆者は農業の大変さとその喜びについて具体例をあげながら論理的に話をすすめ読者の理解を図っている。
エ 筆者は自分のリンゴ栽培について自信がないため、さまざまなことに取り組んだ結果を羅列するにとどまっている。
オ 筆者は農業に対し全くの素人なので、自分の体験から得た事実を読者に話しかけ共感を得ようとしている。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは全て句読点を含んで答えなさい。)

一太郎の祖母は三千年も生きた大妖怪で、孫である一太郎は小さい頃から妖(あやか)し) 達に守られてきた。一太郎は廻船問屋(荷物や旅客を運ぶ船を所有し、その運航を管理する)大店(おおだな)の跡取りであり、幼馴染みの栄吉は菓子屋の跡取りである。

一太郎が驚いた顔で(ア)幼馴染みを見たところに、「ごめんなさいよ」と、客の声が表にする。見ればいつもの煙草屋の(イ)隠居で、(ウ)山羊のような(エ)細面の顔をして、いつものように(オ)腰を伸ばして歩いている。(オ)将棋の仲間の集まる日に、もち菓子などを買っていく常連だ。

老人の目が大福に止まったのを見て「作りたてだよ」と、栄吉が声をかける。隠居は(カ)奥に目をやって、主人がいないのを見ると「作りたて」のもち菓子をかうのをためらった。

「ご隠居さん、菓子を作ったのは栄吉だけれど、あんをこさえたのはおじさんだよ」

迷う様子を見て、内から一太郎が声をかける。驚いたのは隠居よりも栄吉の方だった。

「なんでそうと分かったんだい？誰もそんなこと話さなかっただろうが……」

「さっき一つ食べたからね」

言われた①栄吉の顔が赤くなる。一つ食べてはつきりと差が分かるほど、まだ栄吉の腕は未熟なのだ。話を聞いていた隠居は笑いだして、大福餅を十ばかり求めて帰った。

客の後ろ姿をしばらく見ていた栄吉は、錢箱に金子(きんす)をほうり込むと、元の場所に座った。

視線がだんだん下に落ちる。そのうち床にまで届いて、もうどうにも先に行きようがなくなつてから、吐き出すように(カ)言った。

「昨日な、餡をひと鍋駄目にした」

一太郎が、隣に目を向ける。幼馴染みは下を向いたままだ。

「自分だけで作ってみたんだ。親父に最初、煮方が足りないと言われ、次に水の足しようが悪いと言われ……何としても上手くできなかった。最後には鍋底を焦がしてしまつて。

焦げの臭いが回ると、餡は使い物にならなくなる……」

それで今日は三春屋の主人の口調が厳しかったのかと、②合点がいった。

「おいらあ、一太郎がうらやましいよ」

「この死に損ないが？それは初耳だね」

「ずっと思っていたんだ。でも生きるか死ぬかで寝込むことの多いお前に、面と向かって言えなかっただけさ。病人にいうことじゃあないもの」

だつてさ、と言う③栄吉の声が少し震えている。もう見るのも嫌なのか、店先の菓子の皿から顔を背けていた。

「うらやましくてたまらないんだよ。長崎屋くらいの大店になれば、若だんなが体が弱くつたつて、困らない。店を切り回すのは、番頭やそれを支える手代の仕事だ。現におじさんは、仕事をしないからつてお前を叱ることはないんだろう？」

幼馴染みの言葉に、一太郎は④大笑いの発作を起こしそうになった。店ではたびたび小言が降ってくる。ただしそれは、張り切つて仕事をしようとすると、言われるのだ。父が、

母が、妖達あやかしが一太郎の指先から仕事を大急ぎで取り上げてゆく。ときどき己が、何もできない幼子のような気分になってたまらないと、そう目の前の幼馴染みに言えたらと思う。実際、やっていることときたら、子どものころから大して増えているとは思えなかった。だがそんな気持ちを訴えたとして、いつものように、皆が口を揃えて言うように、贅沢な考えだと言われるのがおちだった。まったくそのとおりだと、一太郎自身、そう思っているのだから。

笑い出したいのか、泣き言を言いたいのか、喉の奥が震えて返す言葉が出ない。栄吉は返事を求めていたのではないらしく、言葉を続けた。

「もっと小さいころは、毎日が楽しかったよ。小さいながら店の跡取りに生まれて、奉公に行かなくてもいいし、体だって丈夫だ。菓子を作らせてみて下手でも、親だってまだまだ気にしていなかったし。そのうち上手くなるはずだと。普通、そうだろう？」

だが職人の技は思うように上達しなかった。親の顔の中に、日に日に浮かんで増えていく **I** を、栄吉は毎日眺めてきたのだろうと思う。

いつも明るく陽気なのも、遊び仲間を作って最近家をあけることが多いのも、菓子から逃げていくせいかもしれない。逃げ続ける訳にはいかないことが、栄吉を今、追い詰めているのだ。

「餡一つ満足に作れないんじゃ、菓子屋はやっていけないよ。そんなことはわかってるけど、他にできることがある訳じゃなし。そうしたらおれはどうすればいいんだろう」

「大丈夫さね。おじさんだってまだ若いんだし、ゆっくり修業をしていけばいいのさ」

あまり慰めにはならないと承知で、一太郎は言葉をかけた。栄吉は下手だが、菓子作り

は嫌いではないらしい。ならばこう言うしかないが、修業を続けても、栄吉のたどる道は、⑤行き着く先の見えない迷路であるに違いない。友のことを思う一太郎は、出そうになるため息を押し殺した。

(確かに物事、なかなか思うとおりにはいかないね……)

畠中 恵 「しゃばけ」

問一 二重傍線部(ア) (オ)の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

問二 空欄A、Cに入る言葉を次の中から選び記号でそれぞれ答えなさい。

ア ちらりと イ はきはきと ウ しゃんと エ ぎよろりと
オ ぼそっと カ よろよると

問三 傍線部①「栄吉の顔が赤くなる」とあるがどんな心情の表れですか。最も適切なものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 悲愴 イ 激怒 ウ 羞恥 エ 焦燥 オ 嘆息

問四 傍線部②「合点がいった」の意味を答えなさい。

問五 傍線部③「栄吉の声が少し震えている」とありますが、どうしてですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 父親に叱られたことを思い出して悔しく思っているから
 イ 苦手な菓子作りをしなくてはならない境遇が嫌で仕方がないから
 ウ 幼馴染みの一太郎の身分がうらやましくてねたましいから
 エ 恵まれた小さいころを思い出し懐かしくなったから
 オ 家業の菓子作りが上達せず途方にくれ不安でならないから

問六 傍線部④「大笑いの発作を起こしそうになった」とありますが、どうしてですか。その理由を分かりやすく答えなさい。

問七 空欄Ⅰに入る二字の熟語を考えて答えなさい。

問八 傍線部⑤「行き着く先の見えない迷路であるに違いない」とあるが、誰のどういう状態を言い表したのですか。具体的に説明しなさい。

問九 この文章について述べているものには○を、不適当なものには×を答えなさい。

ア 一太郎にも周囲の者から思うように仕事をさせてもらえない不満があるのだが、

それは大店の若だんなの愚痴にしか過ぎないと納得している。

イ 栄吉は大店の若だんなである一太郎をうらやましく思い、自分も早く一人前の仕事をこなすようになりたいと思って毎日修業に励んでいる。

ウ 一太郎は体が弱くろくに仕事ができないのだが、家中のものから腫れ物に触るようにならなければならない。

エ 栄吉と一太郎は幼馴染みの関係で、一太郎は菓子作りの下手な栄吉を気の毒に思い慰めの言葉をかけつつ、どうしようもないと思っている。

オ 栄吉は家業である菓子作りが嫌で仕方がなく、いつでも逃げ出したいと思っているが、一太郎には陽気にふるまって自分の心をごまかしている。

これで問題は終わりです。

2010 開智1回

受験番号	氏名

一 問一

ア

イ

ウ

エ

オ

問二

問三

問四

問五

問六

(1)

(2)

問七

問八

問九

二 問一

ア

イ

ウ

エ

オ

問二

A

B

C

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

ア

イ

ウ

エ

オ

※

※